

シンポジウム報告

「ウクライナ・ベラルーシにおける多言語文化」

池澤 匠

1. シンポジウムの概要

2022年12月7日に東京大学文学部・大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室にて「ウクライナ・ベラルーシにおける多言語文化」の題で公開シンポジウムが開催された。昨今の感染症流行に鑑み、zoom ミーティングによる全面オンライン開催となったが、最大同時接続時で約40名の方々が参加された。シンポジウムのプログラムは以下の通りである（所属は開催当時）。

プログラム

主旨説明

池澤 匠（東京大学大学院 博士課程）

報告① ウクライナの多言語文化

中澤 英彦（東京外国語大学 名誉教授）

報告② ベラルーシの多言語文化

清沢 紫織（北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター 非常勤研究員）

司会：池澤 匠

コメンテーター：村田 真一（上智大学 外国語学部 ロシア語学科 教授）

2022年2月24日のロシア連邦軍によるウクライナ侵攻以降、日本のメディアではウクライナの地名表記がウクライナ語式に改められるなど、その複雑な言語事情が知れ渡りつつある。しかしメディアの報道は多分に簡略化されるのが常であり、ある言語が特定の国家・民族と結び付けられがちである。ロシア語は「ロシアの言語」、ウクライナ語は「ウクライナの言語」、ベラルーシは「ベラルーシの言語」などと理解されがちであるが、実際にはこれらの言語は政治的・歴史的事情により複雑に絡み合っている。本シンポジウムではウクライナ・ベラルーシの多言語性に着目し、スラヴ・ユーラシア地域に関心を持つ学生・

研究者・一般の方々を対象に両国の言語事情を俯瞰する機会として立案された。以下に各報告の概要を示す。

2. 報告・コメントの要約

主旨説明「多言語性の普遍性と多様性」

東京大学大学院 博士課程 池澤 匠

従来、日本ではウクライナの地名を「キエフ」「ハリコフ」「ザポロージェ」「オデッサ」などとロシア語式で記すのが一般的であった。しかし2022年3月31日に外務省がウクライナの首都などの呼称を変更することを決定し、各種メディアで「キーウ」「ハルキウ」「リヴィウ」「ザポリッジャ」「オデーサ」などウクライナ語式の表記が一般的になりつつある。Google Trendsでも「キエフ」に対する「キーウ」の検索割合が高まりつつあり、またインターネット百科事典のウィキペディアもウクライナの都市の記事名をウクライナ語式に変更している。2022年のユーキャン新語・流行語大賞のトップテンに「キーウ」がランクインしており、2015年に「グルジア」から「ジョージア」に呼称が変更された時と似たように、地名問題からウクライナにおけるウクライナ語とロシア語の複雑な関係が認知されるようになった。しかしながら「母国語」や「何ヶ国語」のような表現があるように、我々はある言語を特定の国家に結び付けて考えがちである。現在の侵攻で取り上げられることが増えたウクライナとベラルーシの言語状況を考えるにあたっては、言語による民族や国家の規定の概念から脱し、両国固有の多言語性に着目することもまた、重要である。

言語問題に関する議論においては、多言語性が普遍的な現象であることを踏まえなければならない。一般的に日本は単一言語国家とみなされるが、実際には日本語自体が様々な方言を有することで多様性を示しており、また中国語・韓国語・ポルトガル語など一定のコミュニティを形成している言語もある。ウクライナとベラルーシにもこのような言語の多様性が見られ、それぞれウクライナ語とベラルーシ語のみならず、数々の少数言語が話されている。その中でも両国ではロシア語が歴史的経緯から広く用いられており、多くの人がバイリンガルであることから、ウクライナ語とロシア語の混合語であるスルジク、ならびにベラルーシ語とロシア語の混合語であるトラシャンカが発生しており、統計からは各社会で広く用いられる口語であることが示される。

言語問題を扱うウクライナのメディア記事を見ると、同国の多言語性は様々な角度から論じられる。コロムィヤ出身の作家アルテム・チャパイはインタビュー記事などで文学における言語選択について述べている。彼は自らの作品『奇妙な人々』を主にスルジクで記していることについて、実際の話し言葉を表現する手段として位置付けつつ、登場人物や

状況に応じて標準ウクライナ語や標準ロシア語も用いたと語っている。他方で児童文学作家のサシコ・デルマンスキーはスルジクに対して否定的な立場を取っており、混合語の使用には限度を設けるべきだと主張しつつ、自らの著書では主に悪役がスルジクを話すとしている。ロシア語との混合語であるスルジクを文学作品で用いることについては様々な意見があるが、いずれにせよ、現実にある多言語性は文学にも反映されることが分かる。

また多言語性は普遍的である一方、それぞれの国・地域によってその実情は異なる。ウクライナの新聞記事では同国の言語問題がベラルーシと比較される場合が多い。双方共にロシア語が広く用いられている点で共通するが、ベラルーシではロシア語が第2の国家語として法的な規定を受けていることからベラルーシ語の使用範囲が縮小しており、ウクライナでは反面教師のような形でウクライナ語の振興の必要性が論じられる。理想的な言語状況の例としてはヘブライ語を再興したイスラエルや、日本語が国語として事実上位置付けられる日本のような国が挙げられており、社会に安定をもたらす要素として単一言語主義が唱えられている。

以上をまとめると、普遍的な多言語性はウクライナやベラルーシにも当然ながら当てはまることであり、両国ともに様々な言語が用いられるだけでなく、言語接触から混合語が口語として広く使われる。ここでは研究成果のごく一部を紹介したに過ぎないが、ウクライナの場合はこのような複雑な言語事情が文学・文化の分野にも反映されており、また多言語性の実情は国・地域によって異なることから、言語問題の議論においてしばしば比較される。本シンポジウムでは、東スラヴの2ヶ国の例から、多言語性の普遍性と多様性について考え、比較していきたい。

報告① ウクライナの多言語文化

東京外国語大学 名誉教授 中澤英彦

ウクライナは多民族・多言語社会であるが、その実態はロシア語とウクライナ語に限定されるものではない。あるブログからの小話で「私はオーストリアで生まれ、ポーランドで育ち、ハンガリーの学校に行き、ソ連で就職し、今ウクライナに住んでいる」というものがある。これはある個人が様々な場所を転々としたことではなく、ウクライナ西部のリヴィウの歴史を物語るものである。

現在のウクライナの地には古くからキンメリア人・スキタイ人・ゴート族・フン族・アヴァール族など様々な民族の足跡が残されている。1240年にモンゴルの侵入でキーウが陥落すると統一性のあった東スラヴの民族と言語は崩れ始め、他方でポーランド・リトアニアの勢力が増すこととなった。3回のポーランド分割を経てガリツィアの一部はオーストリアに、他の地域はロシアに帰属することとなり、後者ではウクライナ語が弾圧された。

かくして現代ウクライナの言語状況は民族と国境線の移動の歴史によって形作られており、スラヴ語派・ロマンス語派・ゲルマン語派・アルメニア語・現代ギリシア語・フィン＝ウゴル語派・チュルク語族など多くの言語が話されるなど、同国の多言語状況は一筋縄で説明しきれない問題である。

スラヴ語派の中でウクライナ語とロシア語が話されることは広く知られるが、他にもポーランド語話者の共同体や、オスマン＝トルコがブルガリアを征服した際にウクライナに移住したブルガリア語話者も残る。別個の民族を形成するかどうかは議論の余地があり、またウクライナ語の方言と見做される場合もあるが、ポーランド・ウクライナ・スロバキアの国境地帯にはルシン語の話者が住んでいる。ウクライナ語自体はまた、地域差が大きい言語であり、東カルパチアのフツル人が話す方言はポーランド語の影響を受けているとされる。

ロマンス語派に関しては14世紀にルーマニア人とウクライナ人が接触状態にあったことにより、現在の国境沿いのチェルニウツィー州・ヴィーンヌィツァ州・オデーサ州でルーマニア語とモルドヴァ語が話される。

ゲルマン語派の中では18世紀以降にロシア帝国が領土を拡大するにつれてドイツ人が移住しており、ザカルパッチャ州・オデーサ州・クリミア自治共和国でドイツ語が用いられたが、大半は20世紀末に帰国している。イディッシュ語はユダヤ系の言語であり、ポヂツリャ・ヴォルィニ・キーウに話者が集中している。『屋根の上のバイオリン弾き』の原作者シャローム・アレイヘムや、『騎兵隊』の作者イサーク・バーベリに代表されるように、西北ウクライナは「ユダヤ人の故郷」と呼ばれるほど、ユダヤ系文学の中心地の一つであった。イディッシュ語の話者は主にユダヤ教に改宗したチュルク系のカライム人と、中世ドイツで迫害を受けてポーランド経由で移住してきたアシュケナジムから成るが、近年のウクライナではユダヤ人の数自体が激減している。

アルメニア語は16世紀から18世紀にかけてのキリスト教徒とイスラム教徒の戦争の結果、話者が西ウクライナと黒海北岸一帯に移住している。ギリシア語の話者は18世紀にクリミア半島を経由してアゾフ海沿岸に移っており、現代ではドネツィク州とザポリジヤ州の若干の集落に分布する。

チュルク語族については19世紀にブルガリアから移住しオデーサ州の集落に居住するガガウズ語の言語集団と、クリミア・タタール語が挙げられる。2014年まではクリミア・タタール語の学校が多数存在していたが、ロシアによるクリミア併合以降の状況は不明である。フィン＝ウゴル語派からはハンガリー語がハンガリーと隣接するザカルパッチャ州で用いられており、これは同地域が中世以来ハンガリー国の一部であったところ、第2次世界大戦を経て当時のウクライナ・ソビエト社会主義共和国に編入されたことによる。

このようにウクライナでは多くの言語が話されている。2001年の国勢調査を見ると、ウ

クライナ人の 85.2%がウクライナ語を、ロシア人の 95.9%がロシア語を母語としている。しかし国勢調査の統計は自己申告制であるため、民族属性については個々人で判断基準が異なる場合があり、また言語については「母語」として回答するものと実際に使用するものが一致するとは限らず、あくまで目安にしかない。

今後の言語状況の方向性については法律をめぐる動きから察することができる。前提としては 1989 年の言語法によりウクライナ語がウクライナにおける公用語として位置付けられ、1996 年制定の憲法で唯一の国家語として規定されている。クリミアならびに東部における紛争の原因となった法律「国家の言語政策の基礎について」は、ある母語の話者が地域人口の 10%以上を占める場合「地域語」の地位を付与するものであったが、2018 年 2 月に憲法との不一致のため名実ともに廃止された。2017 年の教育法の改正では原則としてウクライナ語が教授言語として規定された。2019 年 4 月の「国家語としてのウクライナ語の機能保障法」は社会生活のほとんどの領域でウクライナ語の使用を義務付けており、例外は EU の公式言語ならびに先住民の言語に限られる。事実上、ロシア語を排除する動きであり、現在の戦争の前からロシア語を用いてきた住民はウクライナ語の習得を始めている。あくまで個人的な予測だが、今後はスルジクの問題が是正され、ウクライナ語が名実ともに国家語として、数多くある言語の中でも推奨されていくと考えられる。

報告② ベラルーシの多言語文化「ベラルーシ語とロシア語をめぐる交流・分断・混合」
北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター 非常勤研究員 清沢紫織

ヴァリヤンツィン・タラスの『私には 2 つの言葉がある』はベラルーシ語とロシア語がテーマとなっており、また双方が使われている詩である。この作品には両語の近似性と連続性が表れており、またベラルーシ語とロシア語を身につけているバイリンガルな個人から成る社会が連想される。実際のベラルーシの社会でも 2 つの言語共同体が共存しているのではなく、2 つの言語が併用されている。全ての個人がベラルーシ語とロシア語の双方に堪能であるとは限らず、どちらか一方が苦手なケースもあるが、双方で読み・聞きをすることは可能である場合が多い。故に少なくとも受動的な多言語使用が成立しており、また両語の近親性からトラシャンカと呼ばれる混成語も用いられる。

ベラルーシでは独立後ベラルーシ語が国家語となったが、1995 年にロシア語にも同じ地位が与えられており、選択的な 2 言語制度が施行されている。2019 年の国勢調査では民族構成でベラルーシ人が大多数を占め、また宗教の面では正教が 82%、ローマ・カトリック教が 12%に上る。国章と国旗は 1995 年にルカシェンコ政権がソ連時代のものを復古させているが、それまでは亡命政権のベラルーシ人民共和国のものが採用されていた。後者は今でも反政権のシンボルとなっており、2 つのベラルーシ社会が存在することが伺える。

ベラルーシ語は UNESCO によって危機言語として認定されており、その話者はロシア語が広く用いられる中、減少傾向にある。国勢調査によれば概して農村部でベラルーシ語が、都市部でロシア語が優勢である。このような統計はあくまで目安に過ぎないが、若干の地域差がある他、都市部ではベラルーシ語の使用が増えつつある。言語政策の面では両言語のいずれか希望する言語で教育を受けることが国民の権利として認められており、その権利を保障することが国家の義務として言語法で規定されているが、実態としてはロシア語が教授言語として支配的である。

しかし近年ではベラルーシ語による「交流」が生まれており、その代表例として市民講座が挙げられる。2013年にミンスクで運営が始まった「モーヴァ・ツイ・カーヴァ」は無料・自由参加・ワークショップ形式・無宿題などを特徴としており、ノートや教科書に頼らず、「コーヒーを片手に楽しんでベラルーシ語を学ぶ」ことを目的としている。これは学校教育で植え付けられたベラルーシ語教育のネガティブな記憶を払拭する狙いがある。2014年以降は複数の講座が設立され、中でもミンスクで開かれた「モーヴァ・ナノーヴァ」は200名を超える参加者が集まり、テレビ番組版も放映された。2021年に社会文化活動の取り締まりが始まると同講座は解散を命じられたが、こうした活動の中でベラルーシ語を地方・農村の言語とするイメージが払拭されつつあり、世界的ベストセラー文学が同言語に訳されるようになってきている。このように都市部でベラルーシ語は人を繋げる役割を果たすようになったが、団結のシンボルにはなりづらい側面がある。ベラルーシ語が話せるか否かが争点になってしまうと、ベラルーシ人同士を分断するリスクがあるため、近年の反政権運動などではロシア語は排除されず、むしろ取り入れられている。

他方、ベラルーシ語の中にも「分断」があり、これは2つの正書法が存在する形で表れている。ベラルーシ語の標準化政策は1921年のリガ条約でベラルーシが西部のポーランド領と東部のソ連領に分割されていた時代に行われた。西部ではブラニスラウ・タラシケヴィチが1918年に発表した『学校のためのベラルーシ語文法』に由来するタラシケヴィチ規範が支持されたが、東部ではソ連政府の主導で正書法改革が進み、新たな公式規範が採用された。1939年に西部がソ連に編入されたことで、タラシケヴィチ規範は在外ベラルーシ人によって用いられることとなった。ペレストロイカ期になり、本国で採用されていた公式規範はロシア化されているという言説が唱えられ、2つの規範の間で対立が生まれた。統合の機運もあったが、結果としては挫折してしまい、今でもソ連時代からの公式規範が用いられ、タラシケヴィチ規範は法的に使用が禁止されている。タラシケヴィチ規範の支持者は、ソ連崩壊後のウクライナ語の規範がロシア語との違いを際立たせている点をしばしばベラルーシ語の脱ロシア化を實踐する際の範とすることがある。例えば、タラシケヴィチ規範の支持者の間では助動詞を用いる複合過去形の他に接辞を足す単純未来形や、[g]を指す文字 r の使用が認められる。これらはベラルーシ語においても歴史的に使用されたことのある

る形式ではあるが、これを規範的と位置づけようとする背景には、これらの言語特徴がウクライナ語において規範的かつロシア語との差別化のシンボルとされていることが明らかに影響している。

ベラルーシ語とロシア語の混成語はトラシャンカと呼ばれ、もとは「干し草と糞を混ぜた家畜飼料」を意味する。1980年代末にベラルーシ語復興の機運が高まるにつれ、ベラルーシ語の純化ならびに権威性が意識されるようになり、非標準的なトラシャンカは批判的に捉えられるようになった。実際には文学でトラシャンカは古くから使われており、近年では村上春樹のロシア語訳中でトラシャンカが用いられると大きな論争を呼んだ。ベラルーシの多言語状況を利用した舞台作品では標準語とトラシャンカが使い分けられており、2018年のゴゴリの『検察官』のベラルーシ語訳では検察官は標準ベラルーシ語を話す、それ以外の人物はトラシャンカを用いるとして話題になっている。

かくしてベラルーシ語とロシア語の関係に限っても、ベラルーシ語の中の多様性や両語の混同性から、様々な支配や文化的影響を被ってきたベラルーシにおける言語の幅広い多様性を論じることができる。

コメント

上智大学 外国語学部 ロシア語学科 教授 村田真一

[主旨説明について] 今回のシンポジウムのテーマである「多言語性」について考えた時に思い出すのは、イタリア南部・モリーゼ州での出来事である。同州ではスラヴ語を話す村が存在しており、私自身も現地に赴いた際、突然「タヴァーリシ（同志）」と話しかけられたことがあった。同じスラヴ語でもイタリアと東スラヴでは大きく言語状況が異なるが、それでは「東スラヴ語固有の多言語性」とは何だろうか。スラヴ世界において言語は非常に重要な意味を持つ事象である。言語は文化の背景を超えて、文化そのものであり、また文化を体現するものとして捉えられる。言語はスラヴ社会で大きな立ち位置を占めているが故に、互いに切り結ぶところもある。

ウクライナとベラルーシの多言語性を表す資料としてアンケート調査がよく用いられるが、この数字が実態を示しているとは限らない。特にウクライナの場合は政治的な情勢で短期間の間に数値が大きく変わっており、数年前と比べてロシア語の使用の割合が減っていることが考えられる。指標となる「実用で使う言語」や「家庭で使う言語」は線引きが難しく、また回答者が調査の際に身構えてしまうことも想定される。上述のようにスラヴ社会では言葉が重い現象として捉えられるため、下手に答えることができない。研究にあたっては、あまり数字に拘らない方がよいのではないだろうか。

言語の研究において文学や演劇は重要な役割を果たす。ウクライナ語の口語と文語はシェ

フチェンコやコトリャレフスキーといった作者によって発展を遂げている。戯曲の中でト書きは文語で、登場人物の台詞は口語や方言で書かれており、このような文学のテキストは研究対象としての価値が大いにある。さらに言えば、文学のテキストはメッセージ性が高く、作品に現れるフレーズがそのまま日常生活で使われることが多々ある。文学の側から言語が形作られていく側面も着目されるべきであろう。

言語使用者は様々であり、ウクライナとベラルーシの事例を考えるにあたっては在外ウクライナ人・在外ベラルーシ人の影響も加味する必要がある。近年ではインターネットの発展に伴い、SNSを通じてコミュニケーションが国境を飛び越えることができる。ただし、対面でのコミュニケーションが少なくなると、今度は文語と口語の境が薄くなり、文語が「崩れる」などといった、新たな現象も起きる可能性がある。

言語政策について触れると、Peter Lang から 2009 年に出版された *Language Policy and Language Situation in Ukraine* に収録されている提言を紹介したい。いわく、ウクライナにおける言語政策はマイノリティの言語であるウクライナ語を公用語としている点が特徴的であり、他の国々のモデルとなるべきところがある。しかし他方で、個人が使用する言語を変えることは強制されるべきではなく、また個々人の言語使用に法律が介入するべきではない、としている。この点については共感できるところである。

[ウクライナ・ベラルーシの報告について] ウクライナの作家を挙げていくと、様々な言語・地域で活動している者が多い。ウクライナを代表するモダニズムの演出家であるレシ・クルバスはオーストリア下のリヴィウ出身だが、ウクライナ語・ポーランド語・ロシア語・ベラルーシ語・ドイツ語に堪能であった。最初はポーランド語・ベラルーシ語・ロシア語を使っていたが、少しずつウクライナ語を作品に用いるようになった。ソ連時代に入るとロシア語を多く用いるようになるが、これはクルバスがキーウに移った際、ロシアの演劇人と交流があったからである。彼は 1937 年に粛清されてしまうが、もし生き永らえていたら再びウクライナ語による演劇を上演していたかもしれない。最近の例では、劇作家のナタリア・ヴォロジビトはもともとモスクワでロシア語の劇を描いていたが、2009 年ごろウクライナへ戻り、ウクライナ語に切り替えて作品を発表している。2017 年発表の『悪い道』はドンバスを扱ったオムニバス形式の戯曲であるが、登場人物や場面によってウクライナ語とロシア語を使い分けている。おそらくはドンバスの言語使用を反映しており、作家本人の芸術手法でもあり、またモダニズムな観点からはグロテスクな効果を狙ったものだと考えられる。観客はウクライナ人を想定しており、双方の言語を理解するであろうから、実際にどのような反応をするか、興味を惹かれるところである。ただし昨今の状況に鑑みると、ウクライナの文学作品はウクライナ語に限られていくことも考えられる。

ベラルーシもまた、越境する作家や知識人が多い。古くはシメオン・ポロツキーがそうであり、またヤンカ・クパーラもリトアニアとロシアで活動しており、ポーランド語で創

作活動を始めている。村上春樹のベラルーシ語訳で関西弁がトラシャンカに訳されたことは興味深い、反対に外国語の作品が日本語に訳される時も同様の問題が生じる。というのも、特定の話し方が一定の方言に訳されてしまうと、イメージが固定され、読者の想像力が広がらない可能性がある。個人的には「作った」方言を使うのが解決策であるように思われる。

報告で扱われたベラルーシ語の学習サークルの名前「モーヴァ・ツイ・カーヴァ」は「興味深い」を意味する形容詞「ツィカーヴァ」をかけているとのことだが、ウクライナ語でもこの場合は「ツィカーヴァ」となり、両語の近似性に気づかされる。また、19世紀のウクライナの戯曲を読んだ際、「не так страшний той чорт, як його малюють (案ずるより産むが易し)」ということわざを目にしたことがあるが、ロシア語の「не так страшен черт, как его малюют」と全く同じ表現である。このことわざはキリスト教の影響が背景にあると考えられるが、スラヴ語は多様性の中にも一定の共通性がある点において興味深い。

3. まとめ

以上のように、本シンポジウムはウクライナ・ベラルーシの両国における複雑かつ多様な多言語使用の実態を十分に俯瞰する機会になったと考える。ウクライナに関してはウクライナ語やロシア語のみならず、スラヴ語派に限らない様々な言語共同体が歴史的事情から今日まで多く残っていることが窺えた。ベラルーシについては、国の分裂から2つの規範が存在するベラルーシ語自体が多様性を示しており、また意外にもロシア語が反政権の団結の手段として用いられることが知れた。さらにスラヴ文化・文学の立場を踏まえたコメントを通じて、ウクライナ・ベラルーシの多言語・多文化を背景とする作家や文学作品が紹介され、言語と文化の切っても切れない関係が例示された。質疑応答ではウクライナ・ベラルーシに特有の近親言語の混合現象に関する質問がなされた。

両国における言語の多様性が明らかになると同時に、これが脅かされている現状についても触れられた。ウクライナでは多彩な言語集団が存在するが、同国の言語政策はウクライナ語の奨励に傾いており、これが他の言語の話者の言語選択に与える影響を今後注視する必要があるだろう。反対にロシア語が第二の国家語として位置付けられるベラルーシでは、ベラルーシ語の話者が漸減しており、市民による普及運動が行われつつも政治的事実により活動停止を余儀なくされていることが紹介された。かくして両国の事例からは言語の興隆と衰微がリアルタイムで起きるといふ、言語状況のダイナミックな側面も浮かび上がった。

近年では生物多様性の保全と同様に、言語を含む人類の多様な文化を保護・振興する必要性が叫ばれる。欧州評議会の主導で採択されたヨーロッパ地方言語・少数言語憲章とい

った国際的枠組や、日本におけるアイヌ語や琉球諸語の保護・継承に関連する政策は、この思想を体現すると言える。しかしながら各講演でも取り上げられたように、言語は国家ならびに政治とも密接に結びついており、様々な事情から個々の言語を理想的に保存することは極めて困難である。特にウクライナとベラルーシにおけるロシア語は、解決が非常に難しく最適解を導けない問題を投げかけている。本シンポジウムが同地域における多言語性の認知に寄与し、また起因する問題の解決に少しでも貢献する契機となることを願う。

謝辞

本シンポジウムは JSPS 科学研究費助成事業特別研究員奨励費 22J12435/22KJ0866「脱ロシア化と再ウクライナ化：現代ウクライナに於ける言語イデオロギーの二面性」（代表研究者：池澤匠）ならびに JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2108 の助成を受けた。立案にあたってはスラヴ語スラヴ文学研究室教授の楯岡求美先生、同助教の古宮路子先生の助力を得た。講演者の中澤英彦先生と清沢紫織先生、ならびにコメンテーターの村田真一先生にはご多忙の中、参加を快諾していただいた。研究室修士課程の清水真伍氏ならびに勝又菜摘氏の両名にはオンライン会議の事前テストなどで協力していただいた。多くの方々の支援なしには本シンポジウムの開催は叶わなかった。また本シンポジウムの企画にあたっては、2022年1月に逝去された三谷恵子先生に相談にのっていただいた。三谷先生のご冥福をお祈りするとともに、ここに記して関係者の皆様に感謝の意を表したい。